大阪ＳＦ八景

―ＳＦ的想像力を刺激する大阪の景観―

堀 晃（ＳＦ作家）

大阪のＳＦ風景―梅田地下街　堀晃『梅田地下オデッセイ』から

少年時代の体験からはじめます。

もう半世紀以上前…正確には1963年2月、姫路から入試のために大阪に来た高校三年の私は、大阪駅を降りて、駅前の風景に仰天しました。

「大阪の道路は鉄でできているのか！」

大阪駅から阪急百貨店、曾根崎警察署まで、道路にはびっしりと鉄板が敷き詰められていたからです。

梅田地下街　朝5時

私は前年に読んだアイザック・アシモフの名作『鋼鉄都市』を思い出しました。遠い未来、砂漠のなかに作られた鋼鉄製の人工都市を舞台にロボット刑事が活躍するＳＦミステリーです。

鋼鉄道路の正体を明かすと、「路面履工板」だったのです。地下工事で現場の交通を確保するために施設される鉄板です。当時、**梅田地下街**の工事中で、鋼鉄の路面は工事現場の天井でもあったのです。

ウメダ地下センターはその秋にオープン、その後も拡大しつづけます。大阪に住みだした私は、梅田に出るたびに様相を変える地下街に興味をもち、15年後に『**梅田地下オデッセイ**』を書くことになります。梅田地下街がとつぜん閉鎖されて、多くの人が閉じこめられる設定のＳＦで、迷路のような地下街で何度も迷った経験がベースになっています。

梅田地下街は今もさらに拡大していて、最近は大阪駅の北側、グランフロント大阪の地下までつながりました。さらに「うめきた」エリアに拡がるのかもしれません。

大阪を歩いてみると、ＳＦ的想像力を刺激する景観があちこちに発見できます。先輩作家の作品も含めて、大阪のＳＦ風景を紹介してみましょう。

大阪市立科学館　手塚治虫『鉄腕アトム』

まず**大阪市立科学館**です。

ここは日本のロボットＳＦ発祥の地ともいえます。

1階に展示してある「学天則」…これは東洋初のロボットが復元されたものです。生物学者・西村眞琴が製作、1928年に京都での大礼記念博覧会に出品されたといいます。そして、この年に**手塚治虫**が生まれています。豊中で生まれた昆虫好きの少年は、18歳でデビューし、たちまち人気漫画家となります。1952年に連載が始まった『**鉄腕アトム**』はロボットＳＦの世界的代表作でもあります。この年は、手塚治虫が上京する前年で、大阪大学医学専門部を卒業し、医学部附属病院でインターンを務めていた時期でもあります。

展示中の「学天則」

個人的な思い出ですが、大学の入学式のあった講堂は科学館の隣接地にあり、手塚治虫さんが学んでいたのはこのエリアだったのかと感激したものです。

こうした伝統があるからか、ロボカップを提唱した浅田稔教授や米朝アンドロイドが話題の石黒浩教授、学天則復元に一役買った町工場など、大阪はロボット研究では世界の最先端にあるといえます。

中之島公園　福田紀一『霧に沈む戦艦未来の城』

市立科学館から中之島を上流に歩くと、**中之島公園**を抜け、先端の通称「剣先」にいたります。大川が堂島川と土佐堀川に分かれる先端部は船の舳先を連想させます。

ここから発想されたのが福田紀一『**霧に沈む戦艦未来の城**』です。中之島を巨大な戦艦に見立てた、史上初の大阪ＳＦともいえる作品。中之島図書館の蔵書を燃やしてエンジンを動かし、両側にかかる無数の橋をへし折って出撃する場面は圧倒的です。

今は剣先に噴水が設置され、上流に向けてアーチ状に水を噴き上げますが、これが大砲のようで、ますます戦艦に似てきました。

砲兵工廠跡（大阪城公園）　小松左京『日本アパッチ族』

剣先からの徒歩圏に大阪城があります。城の東側、**砲兵工廠跡地**を舞台にしたのが**小松左京『日本アパッチ族』**です。今は大阪城公園として整備されていますが、40年前までは錆びた鉄くずが散乱する荒涼とした廃墟でした。ここに「鉄を食べる」新人類が生まれ反乱を起こすという、奇想天外な設定です。鉄が食べられるのかと驚きますが、作品を読むと、本当に食べられそうな、じつに旨そうに思えてくるから不思議です。小松左京展で公開された創作ノートを見ると、鉄の化学反応や製鉄の工程などが詳しく調べられていて、大嘘にもいっさい手抜きしない創作姿勢がうかがえます。（ちなみに『日本アパッチ族』の主人公の名は木田福一で、『戦艦未来の城』の作者への敬意でしょう）

毛馬閘門　北野勇作『かめくん』

大川の上流には**毛馬閘門**と洗堰があります。ここは淀川との分岐点で、水位がちがうため、船は閘門を通過することになります。小型パナマ運河のような機能です。今は近代的な設備ですが、70年代はじめまでは煉瓦造りの建造物が残っていて、ここから続く毛馬堤、淀川のワンドを含めて、私の大阪でいちばん好きな場所でした。毛馬は蕪村の生誕の地とされ「春風や堤長うして家遠し」の句碑があります。つまり近代化と江戸文化が同居する場所ともいえます。

この一帯を舞台とするのが**北野勇作『かめくん』**です。主人公は戦闘用兵器として開発されたカメ型ロボット。そのかめくんが、なぜか大阪市北区の北東端に現れ、ふつうに市民として日常生活を送ることになります。不思議なロボットＳＦ

ですが、なによりも毛馬周辺の描写がすばらしい作品です。

毛馬閘門は、明治時代の淀川改修工事にあわせて作られました。河口付近の分流をいまのかたち「新淀川」にするため、毛馬から加工までの10キロを掘削すの大工事で、これを指導したのがオランダの土木技師エッセル（エッシャー）です。エッシャーといえば画家のM・C・エッシャーが有名ですが、土木技師エッセルは画家エッシャーの父親なのです。

エッシャーの絵には、一枚の絵の中で昼と夜が入れ替わったり、二次元の図形から立体のトカゲが這い出したり、無限に循環する水路が描かれたり、異世界に引き込まれるような魅力があります。

旧川口居留地　芦辺拓『時の密室』

また土木技師エッセルは大阪では**川口の外国人居留地**に住んでいました。大阪市立科学館の下流、瑞建蔵（はたけくら）橋を渡ったあたりが旧川口居留地です。今も川口基督教会などに当時の雰囲気が残されています。

芦辺拓『時の密室』は、エッセルとエッシャーの絵画、明治の川口居留地と現代を重ねた超絶的ミステリーです。推理小説ですからトリックを紹介できませんが、時代を超えた巨大密室などＳＦ的趣向に満ちています。特に明治時代の居留地の描写から、大阪の近代化に果たした役割の大きさが実感できます。（他にも川底をくぐる安治川トンネルなど面白い場所が色々出てきます）

川口基督教会

ミナミ/阿倍野　眉村卓『エイやん』（『新・異世界分岐点』所収）

なんだか市立科学館の上流と下流ばかり紹介しているようですが、むろん大阪のＳＦ風景はキタに限りません。

眉村卓さんは**ミナミや阿倍野界隈**を好んで舞台にされますが、中編『**エイやん**』はその代表例でしょう。作者を思わせる初老の作家がミナミに出たあと、帰路、自分の別の過去らしい世界に迷い込む。作者のいう「私ファンタジー」ですが、この経路の描写が面白いのです。日本橋の電器店街の東あたりのはずが、どこかで阿倍野霊園近くのバス停にシフトしていて、そこから南に歩いて聖天山（阿倍野区の西端）の麓に出る。精密な風景描写なのに読者はだまされて、へんな脇道に引き込まれてしまいます。市内のどこにでもありそうな「高速下のバス停のベ

ンチ」がポイントです。私はこの作品に興味をもって、モデルらしい場所を半日歩いてトリックを見破りました。ＳＦの舞台は名所旧跡に限らないという好例です。

阿倍野区の聖天山

上町台地　牧野修『傀儡后』

大阪市の地勢を代表するエリアといえば**上町台地**でしょう。大阪城がそびえ、地質学的にも震災にいちばん強い一帯とされています。大阪の背筋ともいえる台地で、そこを南北に貫くのが上町筋です。

牧野修『傀儡后』はここを破滅の震源地と設定しています。守口に隕石が落下し、爆心地から半径6キロは危険地帯として立入禁止となる。しかしそこから皮膚をゼリー化する奇病が蔓延しはじめ、大阪は死の街と化していく。危険地帯の最前線が上町筋で、この作品の不気味さは安全の象徴みたいな上町台地から病原体がじわじわと斜面を下り、市街地を侵食していく描写にあります。ミナミの繁華街が無人化したり、大阪湾に大量の死体が浮いたり、破滅的な物語ですが、大阪の景観描写はグロテスクだが魅力的で、自分たちの生活エリアを見回してみたくなる衝動にかられるほどです。

これからの大阪ＳＦ景観

大阪のＳＦ八景を紹介しましたが、魅力的な作品と舞台はまだまだあります。

今後書かれるかもしれない景観をランダムにあげてみましょう。

- 再開発計画が最終段階にある梅田貨物駅跡地。
- 工場とＵＳＪが混在する此花区。
- 広大な埋立地が拡がる舞洲。
- 日本最高層ハルカスとレトロな浜寺公園の木造駅舎を路面電車がむすぶ阪堺線。
- 川の十字路が残る千代崎エリア。

梅田貨物駅跡地

・70年代にもＳＬが走っていた
　城東貨物線の赤川鉄橋。

城東貨物線の赤川鉄橋

　その他、きりがありません。
　しいて共通項をあげれば、近代化や戦後の復興、再開発に際して斬新な都市計画から生まれた新しい風景、計画が失敗して残った「夢の跡」、場合によってはそれらが遺跡や廃墟になったあとの眺めでしょうか。これらは日常生活で歩いたり車窓から見かけることが多いものです。
　ＳＦ風景は教えられるものでなく、発見するものなのかもしれません。
　市内を散策していて目にした工事現場やへんな看板、変わった建物や気になる風景など…それらを調べてみると、背景に予想外の計画が進んでいたり、意外な科学技術史や産業史が眠っていたりする。そんな経験はよくあります。街歩きの面白さはそのへんにあるのでしょう。

著者紹介　堀 晃（ほり あきら）
ＳＦ作家　1970年『イカルスの翼』で作家デビュー、1981年『太陽風交点』で第1回日本ＳＦ大賞受賞。
大阪大学基礎工学部卒業後、繊維会社のエンジニアとして勤務する傍ら、兼業作家としてＳＦを書き続ける。代表作に『遺跡の声』『バビロニア・ウェーブ』など。

広　告